

年末の12月に入ったばかりの今、四人の方の訃報が今年は来ました。Kさんは写真を見れば、「おおあいつか」とわかると思うのですが、交友の無かった人なのでここでは何も言いません。後の三人は、「おお お前 亡くなるのが 早いじゃない」と言えるような仲でした。

Zは医者ながら酒とたばこの好きな方でした。今時ジジイが“ピーカン：缶に入ったピース”を死ぬ間際まで吸うかね、「あっぱれな奴だ」なんてにやりしております。同時期にもう一人の友人Nも無くなりました。Nは指で酸素を計る装置：パルスオキシメーターが80だ、60だと言われながらも入院を拒んでいた。介護の人が即救急車というのを拒み、タバコを吸っていた。これもまたオレにとっては、「あっぱれなやつ」である。

Zと30歳代、仲間の方がやっている一軒屋レストラン、一日一組の客をとるフランス料理店に行った。同道した仲間四五人で出かけテーブルに腰掛けワインを飲み、時間をかけて出てくるフランス料理を堪能しながら、ワイワイ飲み食いをした。ヒラメの焼き物が出たときにZが、「えんがわ ないの えんがわで いっぱい飲みたい」「ここは フランス料理だぞ」と笑っていたのを思い出す。

Hは学生時代から知っていたが、30歳のころに、有名なT画廊にいる、パリにいる、画商になった、ということを知り驚いた。オレは絵が好き、絵を描くのが好き、そんな人生を歩いて来た。仲間から絵を売る商売の方が出てくるとは思いもよらなかった。「そんなじゃ そのうち オレの絵も 売ってくれ」と思いながらも晩年まで付き合っていた。Hは業界でも有名なバイヤーになり、誰もが知っているピカソ・ルノアール・シャガールというような画家の大きな油絵を商っていた。オレは幾人かの画商と交友があったが、ジジイになって気づいたことがある。画商は金融業界の人だ、絵を動かし、数字を動かす人たちだったのだと知った。考えてみれば、絵の評論家は文章を動かす人。美術館員は観客に絵を見せる人。絵もえかきもそんな中の歯車のひとつなんだ。

Sは経営破綻したS信用組合の一族のひとりで、裁判も行われた模様がねっとで出ているが金融のことはまったくわからない。彼のところが昔の頼母子講のようなものかなとかってに思って、さて頼母子講とはと調べた。講に参加した全員がお金を拠出して、資金を一定期間積み立てておき、その大金を必要になった個人が受け取れる。返済は免除だったり、出世払いだったり、成功者からの寄付充当だったり、全構成員にお金が行きわたって役目を終えるともある。鎌倉、室町時代からあったそうで、江戸時代以降、頼母子や無尽は発展を遂げた。日本独自の家族的な助け合いシステムとして盛んに利用された。現代と違い福祉が充実していなかった時代、地域の住民同士が助け合わなければならない相互互助の仕組み。Sの信用組合がどういうものだったか知らないが、普通の弱小銀行だったんだらう。破綻したとはいえ、弱小とはいえ、銀行経営一族だったのだから、けっして貧乏人ではないだらうね。ただ盛んに電話で話し合っていた頃は、破綻の前後で、精神的ストレスが相当のしかかっていたはずだが、淡々とした話口調で電話をくれていた。

展覧会が終わって、ぼちぼち普通のえかき生活に戻りつつある。ジジイになった今、何ごともスローになり、あれもこれもと雑用をすいすい片付けられない。絵を毎朝3時間ぐらい描き、運動に2時間ぐらい使うとあとの時間は残らない。「飲みに行こう」というお誘いがけっこうあり、「断ると次回がなくなる なるべくならいい返事をしておこう」なんていい人ぶった生き方をしているとなんだか窮屈、なんだか自分が飛んでしまう。

今は9月10月の描きかけの絵、それと過去の絵の修繕、これらに血道をあげている。過去の絵の話だが、そう遠い過去ではなくこの3.4年の絵、ぐるぐる巻いてそこらあたりに転がっているものを、「この絵を出そう この絵は展覧会が終わってから修繕しよう」と積んであった、積んであるとはいえ膨大な量である。そんなこんなの絵を毎日さわっている、意地になって、「もっときれいに もっと単純に」とさわっている。この作業が楽しいんだ、面白いんだ、きつない絵がどんどんきれいになっていく、ほほほ。

オレがグルメの話をするのも片腹痛いが、展覧会の最中やら終わってからの食事会があり、いくつかの喰ったものを紹介します。美味しい物を淡々と紹介している人の文章を読むと、その解説の仕方から、彼らが口にはこぼ箸使いまで聞こえてくる。オレは食いものに対する気持ちが薄いのはよくないことだ、「なんでも美味しいよ」はよくないよと反省する。「どれを食べても美味しいよ」これは反省ものかもしれないが幸せである。

馬刺し：FさんOさんが展覧会の最中に連れて行ってくれた。馬刺しの大きな提灯、急な階段を3階まで登ると静かな店があった。馬刺しの盛り合わせと、日本酒を注文した。大きなさらに幾種類かの部位が並んだ新鮮な肉が並んでいる。「生肉は嫌だな」と思っていたが、一切れ口に入れた。あっさり、ねっとり、爽やかに、口の中に広がっていった。白い肉はたてがみだそうだ。美味かったがまた食いたいとは思わない、この一回でいい。世界的に馬を食う国、嫌う国があるらしい。

蟹：娘が金沢に旅行に行き、「蟹買った 明後日に届く」とメールが来た。「無理をした 2匹2万円 メスがおまけに 送料 2000円 高いぞおお」「賀能ガニ 香箱ガニ(メス)」だという。金沢付近で獲れるズワイガニの名前らしい。オレはメスをセイコと呼んでいる。スチロールの箱の蓋を開けると、ビニールに入った氷の下にりっぱな2匹と小ぶりのメスが入っていた。夕方になり、「どうして食うのかね」「知らないよ」「たぶん茹でてあるから そのまま食えるのでは」包丁で足を切りずらり並べた。甲羅を開け皿に盛った。足には包丁で切れ目を入れ机に向かった。椅子に座ってカニ用のスプーンを使い、茶わん一杯以上の足の身が取れた。女性組は甲羅を少し食べ、もっぱら足の身を食べていった。オレは甲羅の上側をスプーンですくって一口二口、「美味しい」次いで甲羅の下側を手で割ってスプーンでせせった。これを口いっぱい喰った時、「美味しい 最高だ」と美味さが口の中で広がった。あと“おじや”を食った。

ホルモン：「T君がいっぱい飲もう」「じゃあ 絵の配達をかね 高槻で」「海鮮 立ち飲み いかが」5時に阪急高槻駅で会い、扉を開けた。彼もいきなり日本酒がいいという。日本酒は“八海山”と“久保田”を二杯づつ飲んだ。“貝の酔の物”と“ぶり大根”をたのんだ。「立ち飲みは これぐらいにして 次 肉か 魚か」オレが肉なんて食ったことが無いので、「そんじゃ ここ 行ってみようか」入ったのが肉を食わせる大型店。「スマホで注文 お願いします」QRコードを渡され、「まずはビール ホルモン焼き 唐揚げ・・・」一杯入っているので長々話をして、「え こないね」「注文 通って ないんじゃ」案の定“注文”ボタンを押し忘れていた。ビールもハイボールも安いが肝心のホルモンも肉がカスカスで不味かった。焼き肉の美味しい物を食ってみたい、焼き肉はもう30年以上喰っていないね。

雉鍋：山仲間の何人かと喰った。2800円の雉鍋ランチを食べに行きましょうという計画が持ち上がった。皆さんジジババになり、「山に行こう」という話が少なくなり、「グルメを 温泉を」の計画は日程がすぐに決まる。オレの車に4人を乗せ、南山城村まで行った。三宅さんが、「やまなみホールで 集合 そこで 昭和28年の 水害の展示がある」そのホールは黒川紀章の設計らしい。今でいう集中豪雨で小さい小川に土石流が流れ落ち100人200人が亡くなっただらしい。90歳近い地元の人が命からがらに逃げ助かったと話してくれた。村の集会所で展示される報告会のような内容だった。見終わり笠置町まで行き広場に車を止めた。「30分ほど登ります」山道を汗をかきながら登ると松本亭という旅館がありそこが目的地。ひとり用鉄鍋に固形燃料を着火。ミニお釜の五目飯、みそ汁は赤みそ。雉は今でこそ珍しいが、太古から狩猟されおいに食べられていた食材だそうだ。鍋の中には雉の肉が三キレぐらい、まずはそれを食ってみた。「むむむ ニワトリと かわらない」というのがオレの感想。まずは鍋を中の汁までの飲みほした。次に雉の入った釜めし、完食をした、腹がいっぱいになった。

- ◎9:00 北小松駅から歩きだした。2.3日前からやっと時間ができた、山に行きたいな、どなたか誘うかな、誘うのは次回にしようかな、迷っていたが天気予報は土曜日がいいというので前日にひとり山行と決めた。高槻で乗り換え敦賀行き新快速、これが一番早い。8:50 到着、トイレ、靴の紐、登山装備を整えた。
- ◎電車での失敗談：新快速は10両ぐらいの編成で、前4両が湖西線だと思っていたが、前4両は近江今津で切り離して敦賀に向かう、うしろの6両も北小松に行くことを今日知った。うしろに乗ってみると空いているので座った。大きなザックを立て膝の上に置いていたが、空いて来たのでザックを横向けたらヒザが熱い、「ふたが閉まっていないのでは」とジッパーを開けてみるとテルモスに入った湯がほとんどなくなっていた。今日は山の上は寒いかもしれないと、熱い湯でコーヒーを飲もうと、暖をとろうと、目論見が外れトホホである。先日テルモスを洗ってゴムパッキンまで洗って装着し忘れていたのである。
- ◎9:30 滝のある登山口を登り始めた。空が青い、陽が射している、気温も高い、冬用シャツを2枚と上衣シャツでは暑いので一枚脱いだ。8月は汗だらだらでバテタ、9月も熱かったが、コロナの後遺症で身体がだるい、一本目あたりからぜ～ぜ～は～は～、この2回とも釈迦に着いたのは2時頃だった。釈迦岳、いくら遅くても1時には着かないと、というオレのコースタイムなのに、と今日は試運転である。
- ◎10:10 涼峠到着。前の2回はここまでがすでにしんどかった、おかしいなあと思いつつがまんして登ったが、今日は快調である、まだ序盤なのでわからないがスイスイ登ってくれよ、と足にいい聞かせている。ICレコーダーの調子が悪い、先ほどの録音がポケットの中で何度も繰り返している、スイッチを切っても治らない、「これは潰れたかな スマホで録音するべ」今度はスマホまでおかしくなった。ICレコーダーは山の上で電池を取りまた入ると機械は再生した。スマホは帰って削除ボタンを押すと機能が再生した。身体をフル回転の登山中は頭に酸素が行きわたらず簡単なことが脳の方で回転しないようである。
- ◎12:10 ヤケオ山にやって来た。うんこが落ちている、小指の半分ぐらいの太さが折り重なっている、色は茶褐色、木の実の黒い粒が入っている、イタチ類の仲間のモノかな。もう少し先でも同じ形態ながら緑がかったものもあった。ヤケオに人がいた、先ほどから前の方でおっさんの話声が聞こえる、もうちょっとでおっさんたちが見えるのでは、と追いながら登っていたが、彼らはヤケオで食事中だった。あんなに仲良くしゃべっていたのに食事は離れた所で黙々と食べているという人間模様。1時間前にヤケ山を越えていよいよ尾根道の登りというところで一本取った。ヤケオまでの1時間、急な尾根道、ぜ～ぜ～は～は～と登っていく、左側は琵琶湖の見える崖、右は山やまが続く。袋にオレ特性のパンを一口大に刻み、その袋に干しぶドウとチョコレートを入れている、これを口にほり込んでモグモグ美味いねえ、この組み合わせが最高だ、次からはこれだ。一本取った時には太鼓饅頭も喰った、水も飲んだ、リンゴも喰った、湯をこぼしたのが痛恨である。
- ◎尾根道にススキがちらほら、もう冬の寒さが近いのでススキも綿毛になってきている。安威川でも逆光の陽の光でススキの穂が輝いているが、カメラを持っていない。その輝きを今日は撮れた、と喜んでいる。上手く写っているかな、帰ってからの楽しみだ。これがフィルム時代なら2.3日後のお楽しみだったんだ。空はぼありと明るい、快晴ではないが風もなく暖かい。アイゼンを着けガシガシ強い風の中を登った思い出がある。
- ◎1:10 釈迦を10分ほど降りたところ、穏やかなところで昼飯を喰った。朝、ベーコン入り野菜炒めを作りそれを朝食と弁当で喰った。亡くなった苗村が、「朝は ご飯を食べんと 昼まで モタン」と言っていたが、オレも山の日、朝、ご飯を描き込むと力が出るのではなんて思っている。それでも一本取る度になにかを口に運んでいる、というのはねえ、オレねえ、スカスカに腹が減ると、ガス欠になると、冷や汗が出て動けなくなる。
- ◎すぐそこが釈迦のてっぺんのはずだが、緑がない、木が茂っていない、ひょっとしてもう一つ向こうのピークかなと思っていると標識が見えた。山の景色は緑が在ると無いとで様変わりするんだね。帰りの下りは10センチぐらいの茶褐色の葉っぱが積もり、踏み外すと恐いし滑るし、と晩秋を感じている。
- ◎2:30 降りてきて水の流れるところでタオルを濡らし体を拭いてザックの中のシャツに着替えた。12月はもうバスがないそうで、山も人が少なかった。4時前に比良から電車、帰ったのは6時前だった。

◎土佐国妹兄行住不知島語第十くとさのくにの いもせ しらぬしまに ゆきて すむこと>

◎宇治拾遺物語にも同文的同話がある。土佐の年少の兄妹が、南海の孤島に漂流し、新天地を発見、土着繁栄の物語。イザナキ・イザナミの国土創造、アダム・イブの人類起源にも通う、創世建国神話。

◎土佐の国に下賤な男が住んでいた。自分の住む浦の田に粃をまき苗代を作り、田植えの時期になるとその苗を船に積み、田植え人などを雇って、それらを引き連れ、食物をはじめ、馬鍬(まぐわ：くわ)・唐鋤・鎌・鍬・斧・たつき(大きな斧)などに至るまで、生活用具一式を船に積み込み出かけて行くことにしていた。ある時 14. 15 の男の子と、12. 13 の女の子を船の見張りに残して、すぐに帰るつもりで出かけた。二人の子どもは船の中で眠り、潮が満ち、船は浮き上がり、南の沖に向かって流されてしまった。父母は船を子供を探しまわったがついにあきらめた。

船は、はるか南の沖にある島に吹き付けられ、子どもたちは恐る恐る陸に上がったが、人っ子ひとりいない、泣いていたがどうにもならない。

女の子が、「もうどうしようもない でも このまま死ぬのは嫌 食べ物があるうちは生きていけるでしょう 食べ物が無くなったら 苗の枯れぬうちに植えましょう」

男の子が、「そうだ お前の言うとおりにしよう」

三浦祐之著<口語訳：古事記>

ありったけの苗を植え、小屋を作り、果物を食べ、暮らしているうちに秋が来て、田がたいそうよくでき、刈り取って兄妹仲良く暮らした。

何年か経ち二人は夫婦になった。子どもがどんどん生まれ、それぞれまた夫婦になり子孫が島に余るほどになった。

土佐の国の南の沖、妹兄島(いもせじま)と呼ばれる。高知県の沖ノ島の事らしい。

◎おらが村の履歴書というか、成り立ちというか、伝説であろう。四国の南西の端っから5キロほどのところに沖ノ島がある、1000年1500年前の話だろう。当時すでに中国大陸や朝鮮半島への渡航は行われていた。遣唐使や遣隋使の船が難破して目的地まで付けなかったことはあったらしいが、渡航に関してはもっと昔の弥生時代でも、弥生人が大陸から渡って来ているのだから、人類は海を渡る勇気や技術はすでに持っていた、たくさんの人が日本列島にやって来た。

人が冒険心をもって、未知の場所に行く、多少の食糧と生活用具を担いで北に南に向かう、オレは怖がりなので冒険はしたくない人だが、「未知の世界に行ってみよう」とあとさきを考えない“むちゃな奴”が男も女もいた、そういうむちゃな奴が山の向こうへ陸地の走破にし、海の向こうへ大海に漕ぎ出した、進んで行った。考えるにその大半が途中で倒れたらうね、それでも次から次に進んで行った。これはすごいエネルギー、使命感、憧れ、何が人を先に進ませたんだろう。農耕民族は進まないもんね。

以前 TV 画像で、台湾から日本列島に向かう実験を見たことがある。丸木舟に人が乗り漕ぎ続けて無事到着するかという試みだった。何度失敗して成功したのか知らないけれど、古代、百回千回と試みて人が日本列島にやって来た。

今昔の話では米の苗、土を耕す道具、しばらくの食糧を持った子どもの兄妹が孤島に上陸した。「泣いていてもしょうがない なんとか生きていこう」今の中学生ぐらいの子どもなら同じように思うんじゃないかな。

兄妹が禁忌を犯して夫婦になり子孫繁栄させていく。古事記を見るとのタブーの話が三度ほど載っている。天地創造の神話では、このタブーの話が多いようだ。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

またまた古事記をはじめから・・・。

◎まずは、イザナキとイザナミのセックス（まぐわり）の話、高揚した二人が・・・。

◎止めることができなかつたのじゃな、そのまま秘め処（ひめど：原文は久美度：女陰）にまぐわいなされての・・・。  
（マグカップを割った、ではない）

◎一度目のまぐわいは失敗に終わり、二度目のまぐわいで次々子が生まれた。と言っても生まれたのは日本の国土である、順番に生まれた。これら八つの島を“オホヤシマの国”という。

淡路島：イザナキ・イザナミのお二方は、天の浮橋にお立ちになり、そのヌボコをズズッと下に向けて指し下ろして、流れ漂う海と泥の混じる塩を、コロロコロと掻き回し掻き鳴らして引き上げなさる、その時に、ヌボコの前からしたたり落ちた塩が、かさなり積もりに積もって島となった。これがオノゴロ島だ。オノゴロ島が淡路島の横の沼島だとは言っていないが、沼島のことだという人が多い。  
イザナキ・イザナミのお二方がまぐわって生まれた最初の子が、アハヂノホノサワケの島、淡路島だ。

四国：イヨノフタナの島：この島は、体がひとつでありながら面（おも）が四つもある。面ごとに名があつて、伊予の国はエヒメと言ひ、讃岐の国はイヒヨリヒコと言ひ、粟の国はオホゲツヒメと言ひ、土佐の国はタケヨリワケと言ふ。

隠岐：オキノミツゴの島：三つの島を中心とした多数の島からできているのでミツゴといった。

九州：ツクシの島をお生みになつた。この島もまた、体がひとつで面が四つもあった。筑紫の国はシラヒワケと言ひ、豊の国はトヨヒワケと言ひ、肥の国はタケヒムカヒトヨクジヒネワケと言ひ、熊曾の国はタケヒワケと言ふ。

壱岐：つぎにイキの島をお生みになつた。またの名をアメノヒトツハシラと言ふ。

対馬：次にツの島をお生みになつた。またの名をアメノサデヨリヒメと言ふ。

佐渡：次のサドの島をお生みになつた。

本州：次にオホヤマトトヨアキヅと言ふ島を・・・。またの名をアマツミソラトヨアキヅネワケと言ふ。

◎このあとも島々を生んでいく。面白い名は瀬戸内海に浮かぶアズキの島はどこか想像がつく。五島列島や男女群島（五島列島に属する無人島。日本最後の有人灯台：2006年まで）の名もある。

島が終わって次に神々を生んでいく。岩や土や風や海の神々、これらの固有名詞が並んでいく。固有名詞はカタカナで書かれ、舌を噛みそうな名前が次々続く。このカタカナの音は古代の日本語を想わせる。

◎次にオホゲツヒメを生んだ。オホゲツヒメは後にスサノオに殺される際に、体から五穀の種を誕生させる。

◎次にヒノヤギハラヲを生んだ。燃え盛る火の神をお産みになつたため、イザナミはみ秀処（ほと）を焼かれてしまい病に臥せってしまった。病の苦しみの中、嘔吐物（たぐり）から、糞から、小便（ゆまり）から神が現れた。生んだのは、島が14、神が40という数字らしい。

- ◎明ヶ田尾山（アケタオであってるのかな？）なんて読むのかなと訝りながら、てっぺんにやって来た。ここから鉢伏山に行ける、前に“みのお記念の森”から歩いたが多分その道につながるはずだと歩き出した。どんどん行って、なだらかな尾根を進んだが、「あれれ おかしい 道がない ここは違うぞ」いつもの道迷いだ、これは違うぞと言うベテランの感、なんてえらそうに言うが、「とほほ 困った こらあ 引っ返そう 今日はここまでかな この天気 この時間」なんて気弱になっている。
- ◎毎月のように止々呂美にある病院へ、リースの絵を持って行って掛け替えている、ありがたくお金をいただいている。今日も1時にその予定が入ったので、「それじゃ 2時ごろ 箕面の山に 登れるかな」と準備を始めた。今の季節、知らない山、4時には車に帰らないと、2時間しか時間がないので、袋にパンと干しブドウとチョコレートを入れた。直前に湯を用意したのにまたもやテルモスを持って出るのを忘れた。
- ◎実はもう一つ、タイヤチェーンの実験をしようと、チェーンも積んできた。少し早めに出たので絵を掛け替える前に高山の駐車場に車を止めた。多分前のアコードと同じぐらいのタイヤ寸法、アコード用に買ったチェーンを持ってきた。チェーンを出して前のタイヤの前に2本を広げて並べた。車を30センチほど前に出した。「タイヤが うまく 乗ってない」そのままチェーンを右に左にずらして、また30センチほど前に動かし、「まだアカン」今度は30センチほど車を後退させた。「おお よし 乗った」タイヤの奥に手を突っ込みチェーンの端っこを探し、「あれ無い 服が汚れる まだ無い」てなことでなんとかチェーンをからませ、次に手前をからませ、ゴムバンドでロック。もう一つのタイヤも同じようにまごまごしながらもタイヤチェーンが装着できた。1メートルほど後退と前進を繰り返し、「よし できた」と今度はタイヤチェーンを外しにかかった。これまた、服が汚れたらいやだな、なんて思いつつチェーンを外し、車を後退させてチェーンを箱にしまった。20分ぐらいでテストが終了、これで雪の山もなんとか行けそうだとまずは一仕事。
- ◎病院では、「ここと ここ 替えよ」と20分ぐらいで作業が終わり、「ありがとうございます」と病院を出た。病院は正月でも、入院されている人たちは普段と同じ、スタッフも出勤しなければいけない、食事も配送しなければいけない、なに一つ手が抜けない、大変な現場である。
- ◎せっかく山を予定していたが、午後には40%の降水確率と天気予報士の弁、空は暗くいつ降ってもおかしくない空模様、駐車場で、ズボンを替え、登山靴を履き、自動販売機で水を買った。車に積んである傘を持って山の方に向かった。以前登山口は確認してあったので、「多分こちだろう」と村の中を歩き始めた。この村は、高山右近の生誕の地らしい、全部で20軒30軒ぐらいの小さい村である。曇り空、樹々の茂る谷筋を登っていく、30分も登ると乗越に着いた。標識があり左に進むと鉢伏山と書いてある。
- ◎「こらあ迷った 今日は ここまでかな 帰る前に 自分の写真を 自動タイマーで 撮るぞ」なんて写真を撮っていたが、「まてまて ここを下るのだ これが道だ 尾根をまっすぐ行っただが ここで90度曲がるのだ」道を発見して思い直して進み始めた。どんどん下る、「ああ これは 前に来た所と繋がる予感」出発から小1時間で三叉路に下りてきた、繋がった。まっすぐ行くと鉢伏山、左に行くと鉢山跡から道路に出るとなっている。鉢山：調べるとこのあたり一円にかつて、銅やマンガンの鉢山があったようで10か所ぐらいの名前が出ている。もっとも今は跡地があるぐらいで、創業している所は全くない。
- ◎11月のシエスタ倶楽部の個展が終わって、何かと用事が続く。昨日も10歳上のHさんが、「見に行けなかった足が言うこと 効かない が 見たい」とおっしゃるので カバンに3・6・10号の絵を入れ自転車で訪問した。天高、阪大：法、神戸銀行の元エリート社員、雑談1時間、「見せて」「ううう 気に入った ほしい」「ありがとうございます」「売れた・うれし」展覧会が終わってからお二人からこういう話を伺った。今は、10月ころに、「次の展覧会に 出品する絵は どれにするか」と在庫の絵を200枚ぐらい出して30枚ぐらいを選んだ。「あとの 絵は 展覧会が終わったら 修繕だ」と約束を忘れずに精を出している。オレは、ほかのモノ創りの方も同じだと思うが、「今がいい 今が最高」と思っているが、じっくり昔の作品を見ると、感情が上手く走っている、乗っている、これは決して荒れてはいない・・・てな風にも感じている。

- ◎いつもの新快速、いつもの高槻駅、「さてよ 敦賀・米原 二つ書いてある どういうこと・・・」先日確認した時はこの新快速は全車両が湖西線に行くはずだった。今、駅の案内板には山科駅で二股に分かれ、前4両が湖西線へ、後が東海道線に行くようだ。北小松駅で駅員に聞いた、「土・日は全車両が湖西線 週日は 二股に分かれる」ということだった。これはまあ、よくわからん、の話なりけり。高槻駅から北小松駅まで立ちっぱなし、たった4両の車内、年末に動く老若男女でいっぱいだった、しかも俺のまわりには多分中国語の若い男女の群れだった。北小松駅で掻き分け降り立つとホームにはオレひとりである。「えええ 登山客がいない」オレの予想では、暇を持て余したジジババ連が若者たちがいると想像していた。北小松から、比良駅まで縦走したが、ひとりの中年のおっさんに抜かされただけ、あとは人っ子ひとり出会わなかった、と言う不思議である。
- ◎前日の山行記録の写真によると雪はほとんどないようだ、と思案しつつもアイゼンを選んだ。12本爪はずしり重い、「6本で 行けるだろう」それでも防寒のジャンパーを持つと、荷はいつもよりやや重い、電車での1時間の立ちっぱなし、体力が減っているかなと思いつついつものように涼峠にやって来た、天気が良くない、今にも降ってきそうな暗い空、「予報士は 今日晴れ と言っていたんじゃないのかな」山のサイトの予報士も「明日は登山に最適」とおぬかしだった、不思議だね。雨は降ってこないが、12月の山は風が冷たい、登りは汗が出る、シャツとセーターの3枚でヨイコラショである。アイゼンも不要かもしれない、ピッケルは家に置いて来た。
- ◎昨日は恒例年に二回の墓参りに行った。谷町九丁目と長瀬に二か所の墓がありそこを車でまわるが、昨日は万博付近のり宅に渡すものがありそのまま新御堂筋に乗って谷町九丁目に向かった。いつも直前になって花を用意するが、需要が増える時期なので花も高騰し二軒分の花代が3000円以上することがある。今回は1週間前に亀岡の方で安く買ってきてもらった、1000円ちょっとでバケツいっぱいあったのを四つに分け、庭に生えている蓮の葉やナンテンの葉を追加し、それを束にしてゴムバンドで結んだ。
- ◎12:10 ヤケオ山にやって来た。手前で上を見上げ、「大きな石がある ヤケオ だろう ただ 順調すぎる ひょっとして もう一つ向こうかな」と思いながら登ってきた、今日も元気である、スイスイ登れる、ありがたい。このあたりでガスってきた、風は冷たい、ネックウォーマーを付けた、景色は見えない、上の山も琵琶湖も見えない。樹々は葉を落とし枝だらけ、常緑樹の小さいものが黒い葉を残している。ススキも綿毛が無くなって箒の先のような形状が残っている。降ってくれるなと思いつつ出発した、もう30分ぐらいでてっぺんだ。先ほどひっくり返りかけた。土色の地面が湿っている、雨が降ったのかなと思っていたが、ずりりと滑る、あれれと手を付き泥んこだ、次の足も滑る、なんだこれは、ズルズル滑る土である。想像だが地面の1センチ下で凍った氷が解けズルリを誘発したのかね。先日、奈良の前鬼付近の国道で車が土砂崩れに巻き込まれたらしい。解説では、夜に地面の下が凍り、昼にそれが融け雨でもないのに土砂崩れが起きらしい。怖いねえ、と言うけれど、雪崩にしる土砂崩れにしる、その一瞬にそこに居なければ助かる、という理屈が成り立つ。
- ◎12:50 釈迦のてっぺんにやって来た。雪がほんのポツリまだらに残っている、このあたりは標高が1000ぐらいなので、日本海に近いとはいえ雪は少ない。人がいない、今日ぐらいはスキモノの連中が普段より多く山に入ってるはずと踏んできたが人っ子ひとりいない、登りで元気な中年に抜かされた一人しか出会わなかった。
- ◎3時に元ロープウェイの駅跡に下りてきた、無事下山である。道に軽ジープが一台止まっている、それでも人が山に入っているということだ。翌日の情報で、友人が堂満に登り15人ほどに出会ったそうだ。軽パトカーがやって来た、「滋賀県警山岳救助」と書いてある。パトロールかな、登山届を回収している。登山届は入れっぱなしかと思っていたが回収してくれているんだと感謝である。オレも北小松駅で投函した。今日はテルモス2本に湯を入れてきた、昼飯はカップヌードルと店のおにぎり二つ、下山途中にインスタントコーヒーを2杯、下山して腰を下ろしビスケットを出し3杯目を飲んでいる、美味い。
- ◎山中でラインを見た、新しく買った炊飯器で炊いたご飯と、四国から送られてきたじゃこ天でお盆に載っている、オレも帰ってウイスキーのハイボールでこれらをいただく、帰宅は6時でした。